

聞いて返す力を高める国語科「話し合い活動」の充実 —発表しながらない児童を視野に入れて—

家近 理恵（葛飾区立亀青小学校）

1. 研究の目的

今回の小学校学習指導要領改訂では、教育内容に関する主な改善事項の第1項として、「言語活動の充実」が挙げられている。これにより各教科の言語活動の充実のため、その中核を担う国語科は、従来以上に大切な役割を担うこととなった。中でも、「言葉を通して的確に理解し論理的に思考し表現する能力」「互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力」を育成することが重視されている。併せて「伝え合う力」は、知識基盤社会化や国際化が進展する中、相互理解を深め、豊かな人間関係をはぐくむ上で必要な「生きる力」を支えるために最も重要な力の一つであると捉える。

この「伝え合う力」の育成に当たっては、話し合い活動のような双方向的な言語活動の充実が大切である。しかし、実際の授業では、児童の話し合いがうまく連鎖せず、話し手が話し、聞き手が聞く、という一方的な意見の「言い合い」に陥る場面がよく見られる。このような単なる「言い合い」をいくら繰り返しても、伝え合う力は育たない。その改善に向けて、一番大きな役割を果たすのは「聞いて返す」という行為だろう。なぜなら、話を「聞いて返す」という行為がなされて始めて話し合い活動が生まれるからである。話し合い活動では、聞き手が話を聞いてどのように返すかが、その後の話の展開に大きな影響を与えていく。聞き手が意欲的に聞き、考えて返す活動が活発になされれば、話し合いがより深まっていくことになる。そのため、「伝え合う力」を高めるためには、「聞いて返す力」の育成が重要だと考えた。

そこで、本研究では、研究の目的と仮説を次のように設定し、研究を進めることとした。

（1）研究の目的

国語科の話し合い活動において、児童の「聞いて返す力」育成のための指導の手立てを明らかにし、「伝え合う力」の育成に役立てる。

（2）研究の仮説

小学校国語科の話し合い活動において、下記の3点の指導の手立てを取り入れることで、友達の意見を聞いて返そうとする意欲が高まり、「聞いて返す力」が育つであろう。

- ① 話し合い活動の基本パターンの設定と繰り返しによる定着
- ② 「言葉のキャッチボール」という合言葉による「聞いて返す」ことの意識化
- ③ 「つなぐ言葉」を重視した「聞いて返す」話し合い活動の実施

2. 研究の方法及び経過

（1）研究の方法

- (i) 基礎研究（文献や先行研究の分析・検討、先進校の実践事例研究）
- (ii) 調査研究（アンケートによる所属校児童（4年生）の実態調査及びインタビュー）
- (iii) 実践研究（検証授業の実施：第4学年3学級「学級で話し合おう」全6時間）

(2) 研究の経過

基礎研究(4月～8月)	調査・実践研究(9月～11月)	まとめ(12月～3月)
・文献研究 ・先行研究 ・先進校の実践事例研究	・調査研究 ・検証授業の実施	・検証授業の分析と考察 ・研究の成果と課題の検討 及び整理

3. 研究の成果

(1) 「伝え合う力」育成のための指導の手立ては、下記のようなものが考えられる

(ア) 学習課題設定の工夫

児童が話したい、聞きたい、という意欲を喚起できるよう、以下の5つの言語意識を明確にした学習課題を設定し、話すことの必要感をもたせる。

- ① 相手意識→だれに伝えるのか。
- ② 目的意識→何のために伝えるのか。
- ③ 場面・状況意識→どこで何人で話すのか。
- ④ 方法意識 →どんな方法で伝えるのか。
- ⑤ 評価意識 →適切に伝えることができたか。(自己評価、相互評価)

(イ) 技能指導の工夫

伝え合う力を高めるために、技能の育成は欠かせない。なぜなら技能なくして話し合い、伝え合いはできないからである。話し合いの進め方や発表の仕方等の伝え合うための技能を指導するというと「一つの型にはめることになるのではないか」といった考え方をされがらだが、学び方を学ぶという視点でとらえれば、児童の学習意欲を高めることにつながる。伝え合うための技能を指導すれば、児童が持っている表現することの不安を軽減したり、困っていることを取り除いたりすることができる。それにより、児童の表現意欲が高まり、積極的に表現するようになることも期待できる。最終的には、言語に関する能力がはぐくまれ、コミュニケーション能力も育成することができると思う。(渡辺ら、2010)

ただし、児童の発言の枠が限定されないように、指導する技能は必要最低限のものとし、拡張の幅をもたせる必要がある。形式的になりすぎない適度な技能指導が望まれる。

(ウ) 学習形態の工夫

全員の話す機会を保障し、一人一人が確実に言語能力を高められるように、計画的に、スモールステップによる場の拡大を組み込み、実施する。

■少人数(2人組、小グループ〈4人組〉、中グループ〈学級半分〉)⇒学級全体

(エ) ワークシートの工夫

話し合い活動前後の記述欄から自己の考えの変容が見とれるワークシート、振り返り欄から自己の成長が実感できるワークシートを活用することで、個々の児童の意欲を向上させることができる。そのワークシートは、ポートフォリオ形式で保存し、皆で読み合えるようにしていく。個々のよさを教師が全体に紹介したり、友達と読み合ったりすることで、全体でよさを共有し、クラス全体の意欲の向上につなげていく。

(オ) モニターによる評価活動の工夫

学習活動の中に、話し合い活動の状況を客観的に見てアドバイスするモニター役の児童を位置付ける。(西山ら, 2001) モニター役の児童が、評価の観点が明示されたアドバイスカードに、友達の良かった点や改善点をチェックした後、その結果を伝え合う活動を取り入れる。それにより、伝えられる側ばかりでなく、伝える側も、話し合い活動での評価の観点を、今後の話し合い活動に生かそうとする意識が強まる。

(カ) 振り返り(自己評価・省察)の実施

授業終了後、毎時間、ワークシートの振り返り欄にて授業の振り返り(自己評価)を行う。それにより、児童の評価意識を高めると同時に、自己の課題を発見したり、成長を実感したりさせることができる。

(2) 「聞いて返す力」育成のための指導の手立ては、下記のようなものが考えられる

(キ) 「聞いて返す力」の育成

① 話し合い活動の基本パターンの設定と繰り返しによる定着

話し合い活動の基本パターンを定め、話し合い活動中、基本パターンに沿った活動を繰り返す。これにより、児童が先を見通して安心して活動できるようになり、話し合い活動が活性化され则认为る。

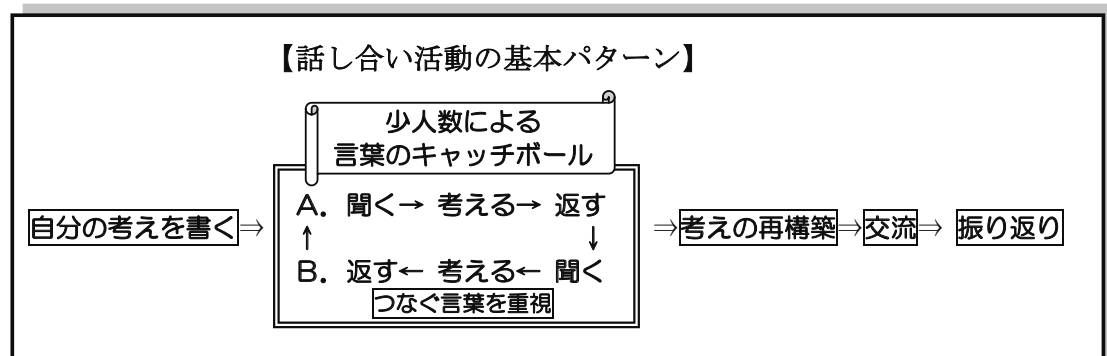
② 「言葉のキャッチボール」という合言葉による「聞いて返す」ことの意識化

活動の基本パターンの中でも、友達の意見を聞いて返す活動を「言葉のキャッチボール」と名付け、「言葉のキャッチボールをたくさんつなごう」を合言葉として聞いて返す活動を促進していく。児童に馴染みやすい合言葉を用いることで、相手にボールを投げるように言葉を返そうとする意欲を喚起し、積極的に聞いて返す活動を繰り返す聞き手(聞き手が瞬時に話し手に入れ替わる能動的な聞き手)が育つものとする。

③ 「つなぐ言葉」を重視した「聞いて返す」話し合い活動の実施

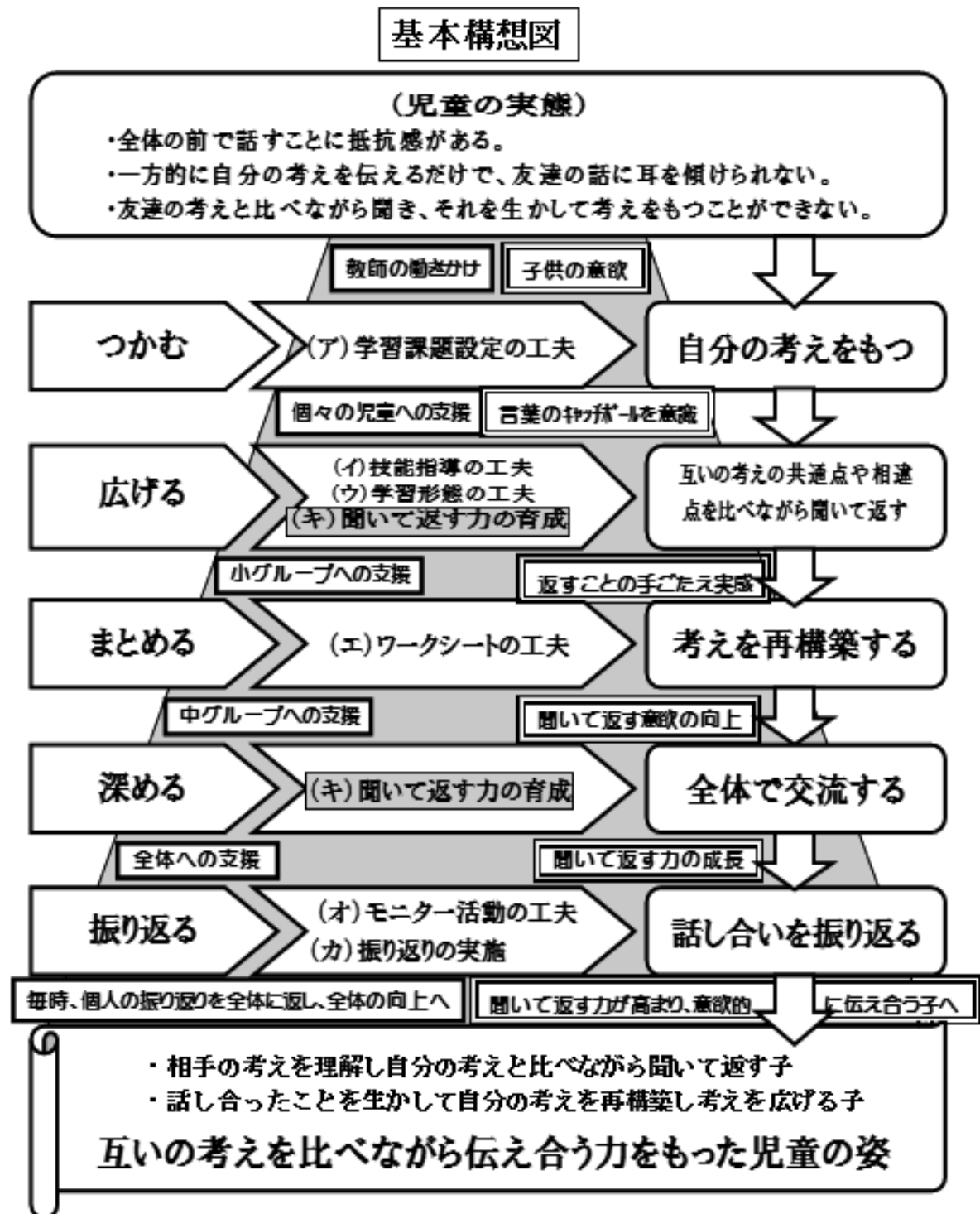
友達の意見に言葉を返す際、「つなぐ言葉」を用いて返すことを常に評価する。これにより、話し合い活動の中で「つなぐ言葉」を使おうとする意欲が高まり、友達の意見と自分の意見との共通点や相違点を考えながら話を聞いて返す習慣が定着していく。結果的に、聞いて返す力が育つものとする。

同意	・〇さんと同じで・〇さんに賛成で・〇さんと似ていて
反論	・〇さんと違って・〇さんに反対で・でも
質問	・〇さんに質問で・くわしく教えてください・どうして
追加	・〇さんにつけたしで・～を言いかえると など



(3) 授業構想図

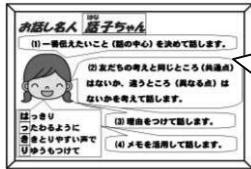
下記の図は、先行研究をもとに考案し、検証授業後の結果から改良を重ねた授業構想図である。この基本構想をもとに授業を組み立て、「伝え合う力」の育成を図っている。



(4) 検証授業例

9月に所属校小学校（対象：第4学年3学級）において検証授業を実践した。基本構想図に沿って指導の手立てを工夫し実践した内容を以下に示す。

【単元の指導計画（第四学年 国語科「学級で話し合おう」 全6時間）】

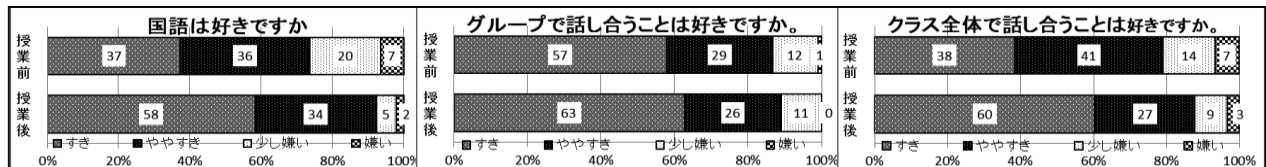
時	学習内容と主な学習活動	「聞いて返す力」育成のための手立てと実際
1	○話し合いで気をつけることを話し合う。 - 教材文を読み、単元の目標（学級で話し合いをすること）を知る。 - 話し合い例文のよいところを話し合う。 - つなぐ言葉を使って二回聞き返すことを目標に対話を行う。 （言葉のキャッチボールの練習） - 視線を合わせないで対話を行う。 - 感想（2つの対話の違いなど）を話し合う。 - 発言者（話し方）、聞き手（聞き方）が気をつけることを知る。	（キ）聞いて返す力の育成  2人1組で言葉のキャッチボールを繰り返す練習をしたよ。 50回以上もキャッチボールをつないでいた友達がいて驚いたよ!! つなぐ言葉を使うようにしたよ。 「どうして」と理由を聞いたり、「同じで」と同意したりする言葉をよく使ったよ。プリントにないつなぐ言葉もたくさん使えたよ。 「話を（つなぐ）言葉」には、いろいろな理由が……です。 ★〇〇さんの意見も聞いて、さっきと……
2	○それぞれの役割が気をつけることを話し合う。 「ここが大事」を基に、司会者が気をつけることを話し合う。 - グループで司会者を立てて話し合いのロールプレイングをすることを知る。 （前半と後半で役割をローテーションする。） - 個人の意見と理由をワークシートに書く。 - グループで話し合いたい話題について、理由を明確にして話し合う。 - 話し合い後の考えをワークシートに書く。 - グループの話し合いで決まった内容と理由を発表する。 - 司会・発言者・記録者・聞き手の4つの役割で、それぞれ気をつけることを話し合い、再認識する。	（ア）学習課題設定の工夫 話題を自分たちで選んだから、本気になったよ。お友達に納得してもらうために、理由をわかりやすく話すようにしたよ。 ＜学習課題例＞ - 文学的文章で読みを深める課題 - 説明的文章の初発の感想から出た課題 - 本の紹介やスピーチなどの話し合い課題 （イ）技能指導の工夫 （技能の掲示）  最初に「よい話し手」「よい聞き手」のコツを教わったよ。「話子ちゃん」と「聞男くん」をめざすよ。 （話型の提示） 話し合いの進め方 ①これから話し合いをはじめます。 ②司会は〇〇です。記録は〇〇です。 ③今日は、（ ）について自分 ④の順番に聞く。⑤手をあげている ⑥〇〇さん、お願いします。なぜなら ⑦私が……と……です。なぜなら ⑧の……を聞いて、しつこく……ありま ⑨〇〇さん、おねがいします。 ⑩〇〇さんにしつこく…… ⑪……ですか？ …… ⑫……について、もうしつこく…… ⑬……は……と……ですか？

3	<u>○4人グループで話し合いの練習をする。</u> 1. 前時の学習を振り返る。 2. グループごとに決めた話題について話し合い練習することを知る。 3. 個人の意見と理由をワークシートに書く。 4. グループで役割分担しながら話し合う。 (前半と後半で役割をローテーションする。) 5. 話し合い後の考えをワークシートに書く。 6. 話し合い方について相互評価や自己評価をする。 7. グループの話し合いで決まった内容と理由、反省や感想を発表する。	(ウ)学習形態の工夫(小グループ⁹⁹)  グループで話すのは楽しいよ。どんどん意見がでるから、もめることも多いけどね。..... (エ)ワークシートの工夫  話し合う前と後に自分の考えを書くよ。後で見ると、話し合った後に考えが変わっていることも多いんだ。
4 ・ 5	<u>○中グループ(学級半分)で話し合う。</u> 1. 前時の学習を振り返る。 2. 話し合いの進め方、話題、話し合いのめあて、ポイントを整理する。 3. 個人の意見と理由をワークシートに書く。 4. 役割を果たしながら、話し合う。 ・ クラス半分...話し合う。 5. クラス半分...観察する(モニター活動)。 5. 話し合い後の考えをワークシートに書く。 6. 話し合い方について振り返り、相互評価をする。 7. 本日の学習感想を発表する。 ・ 話し合いでよかったところ、改善したほうがよいところなどを発表し合う。	(オ)モニター活動(相互評価)の工夫 前列：話し合い活動 後列：モニター活動  友達にアドバイスするために、集中して観察していたよ。後ろから友達を観察していると、上手な話し方やよい姿勢をまねしたくなるよ。話の内容もどんどん深まっていて、すごいな~と思ったよ。 (カ)振り返り(自己評価)の実施  友達のことを聞いていたら、新しい考えが浮かんだよ。今日は聞くことはよくできたけど、発表をあまりできなかったな。次回は、もっとたくさん発表するぞ！
6	<u>○学級全体で話し合う。</u> 1. 話し合いのめあてと話題を確認する。 2. 個人の考えと理由をワークシートに書く。 3. 学級全体で話し合う。 4. 話し合い後の考えをワークシートに書く。 5. 再構築した考えを発表し合う。 6. 話し合いを振り返り自己評価する。	意欲的に伝え合う子供たちの姿  自分の考えを積極的に発表することが多くなったよ。友達のいろいろな意見を聞くことも楽しいよ。話し合いって、楽しいな~!!

（５）検証授業前後の調査結果

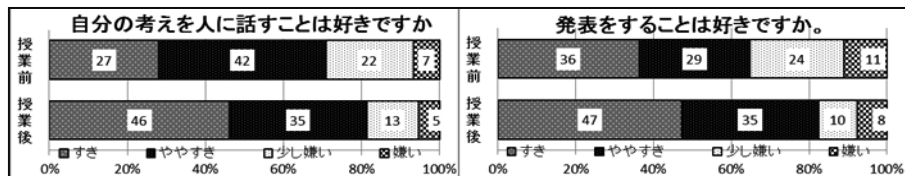
（い）全体の意識調査から

下図は、検証授業を進めた３学級で、授業前と授業後に話すこと・聞くことに関する意識調査アンケートを実施し、比較したものである。どの項目でも、授業前より授業後に「好き」または「やや好き」と答えている児童が増えている。ここでは、検証授業実施後に児童の意識がどのように変化したかを、アンケートの回答や担任インタビューの結果から探っていく。



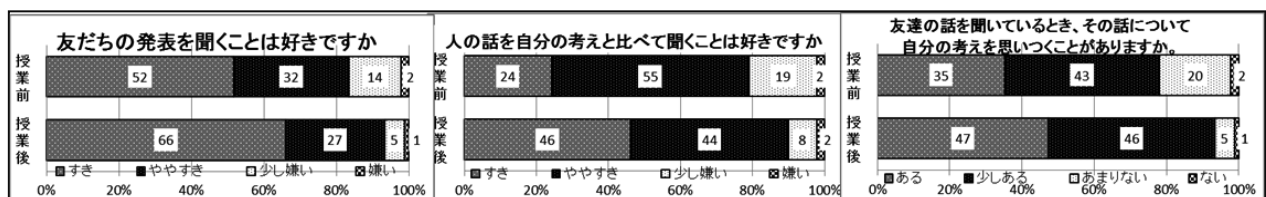
（い）-１話すことに関して

自分の考えを人に話すことが「好き」または「やや好き」と答えた児童は、69%から81%に変化し、また、発表をすることが「好き」または「やや好き」と答えた児童は65%から82%に大きく変化した。意識の変化した児童の授業中のワークシートへの記述内容を見ると、「たくさん発言できた。」「話し合いが楽しかった。」「話し合いをもう一度したい。」などの記述がほとんどの児童に見られた。これら記述内容と意識の変化の結果から、検証授業中、グループや全体で話し合う活動を繰り返し実施し、自分の意見を話す活動を多く経験することで、話す楽しさを感じる機会が増えたことが、話し合いで自分の意見を発表したい、という意欲の向上につながったと考えられる。



（い）-２聞くことに関して

友達の発表を聞くことが「好き」または「やや好き」と答えた児童が、84%から93%に変化し、また、人の話を自分の考えと比べて聞くことが「好き」または「やや好き」と答えた児童が79%から90%に変化した。意識の変化した児童の授業中のワークシートには、「友達の意見を聞いていると自分の意見が変わる。」「いろいろな意見が聞けて楽しかった。」「いろいろなことを聞かないと質問できない。」などの記述が見られた。これらの結果から、自分の考え方と違う意見を聞くことで考えが深まることを実感できたことが、聞く楽しさに結びついたものと考えられる。



(i)-3 担任へのインタビュー調査より

検証授業実施前後の児童の変容を学級担任に尋ねた。

A先生 今まであまり発表しなかったSさん、Mさん、Aさんが発表する機会が増えた。

子ども達だけで話し合いをさせても、できている。担任の声かけが減った。

B先生 人の話を聞いて、返せるようになってきた。今までは友達と同じ考えを返すことが多かったが、友達と違う意見を返す機会が増えた。例えば、理科「もののあたたまり方」の授業で、「〇〇くんは～～と言ったけど、ぼくは〇〇くんと違って～～だと思う」と、友達の意見を聞いて、違う意見を返していた。

(i)-4 アンケート調査から明らかになった課題

検証授業実施後、「友達の発表を聞くことが嫌い」「やや嫌い」と答えた児童が6%と、聞くことに関しては肯定的な回答が多い一方、話すことに関しては、検証授業前後とも一貫して「人に話すことが嫌い」「やや嫌い」と答えた児童が18%、「発表することが嫌い」「やや嫌い」と答えた児童が18%もいる。このような否定的な回答をする児童がどのような気持ちだったかを探るため、嫌いと答えた児童のワークシートの記述を見ると「今日も発言できなかった。」「自分から意見を言えなかった。」「恥ずかしがらずに言いたい。」など、発言できない自分を責めたり、発言したくてもできないもどかしさを感じたりしている記述が多く見られた。このように「聞いて返す力」の育成を目指した授業を実践しても、依然として「返す力」が育たない児童(＝発表したがるしない児童)はどのような心理状態なのか、また、それらの児童にはどのような手立てが有効なのか、を追究するため、さらに詳しくインタビュー調査を行うこととした。

(ii) 発表したがるしない子を変える“キーワード”をインタビューから探る

授業前も授業後も一貫して発表することが嫌いな児童の心理を探るため、発表が嫌いな児童を2名抽出し、授業後に詳しくインタビュー調査を行った。その回答から、発表したがるしない子を変えるキーワードを探ることとした。

(ii)-1 不安の軽減

検証授業後も一貫して「発表することが少し嫌い」と答えていたAさんだが、授業後のインタビューでは、心境や行動の変化が表れていた。

以前は「自分だけ違う考えなのかな」と不安に思っていたけど、話し合いの授業を繰り返したことで同じ考えの人も多いことに気づいて安心できた。自分の考えに自信がもてるようになった。前より、授業中の発表が増えてきたと思う。最近では、友達と同じ考えでなく、友達と違う新しい考えを言ってみたい、と思うようになった。

話し合いの経験の繰り返しから得た「同じ考えの友達が多い」という気づきが、「自分だけ違っていたら」という不安を軽減し、発表することへの抵抗感を減らしている。

「特にグループの話し合いが楽しかった。」と言うAさんに、その理由を聞いてみた。

少人数だと、あまり緊張しないので、意見を言いやすい。大勢の前だと、「間違えじゃないか?」「みんなと違いすぎるんじゃないか?」と、とても不安に思うが、グループではそう思うことも少なく、意見を言いやすい。友達の意見も聞きやすかった。意見をもっと聞きたい子に、細かく指名して聞けるのもよい。

やはり、話し合い活動では「間違えること」への強い不安がついてまわっているようだ。この不安を軽減する手立てとして、少人数で話し合うこと(手立て(ウ))が有効であることがわかる。

ワークシートを見て話すことで、話していることが分かるのも良かった。グループメンバーだけで話し合っているとき、途中から先生が来ても、ワークシートを見れば話し合いの状況をわかってもらえる。

さらに不安を軽減する他の手立てとして、ワークシートの活用^{手立て(エ)}も挙げられる。事前に考えを書いて手元に置いていたことが、不安の軽減につながっていたようだ。

(ii)-2 考えや価値観が広がる楽しさ

今回の検証授業では、聞くことの有用性を実感できた場面が多かったようである。

自分の意見を言うことよりも、聞く力がついたと思う。友達の意見を聞くと、こうすればよかった、と思う。あの意見も良かった、と納得できたり、新しいことがわかったりする。

友達の意見を聞いて新たな気づきが得られたり、考えが深まったりしていたことがわかる。

発表するのは決まった子が多いが、今回の授業では、ふだん発表しない子の意見が聞けて、みんなの考えていることがわかったことが、面白かった。いつも発表する子ばかりでなく、あまり発表しない子がどんな考えをもっているかにも興味をもつようになった。最近は、いろいろな友達の意見を聞きたいと思うようになった。

いつも発表する友達の考えを聞くことよりも、ふだんあまり発表しない友達の考えを聞くことのほうが興味深かったようだ。自分と違った多様な意見に多くふれることに楽しさを感じて、聞く意欲が高まっていたことがわかる。

(ii)-3 理由を分かち合う有用性の実感（学級経営への好影響）

話し合い活動の充実が、健全な学級経営につながることを示唆する回答も得られた。

最近、言い合いがなくなり、喧嘩が減った。クラスみんなが仲良くなってきたと思う。先生がいなくても、自分たちで話し合いをして、理由を聞いて解決できるようになった。

このようなクラスの変化を感じていたA子さんに、変化の理由を聞いてみると

言葉のキャッチボールが続くようになったから、手を出さずに言いたいことを言葉で言うようになった。前は喋らずに黙っていた子が、自分から喧嘩の理由を説明するようになってきた。相手の考えを聞けるようになった。

以前はしゃべらずに黙っていた子も、友達と理由を分かち合うことが問題解決に有効だと実感できたことが、行動の変化につながったようだ。話し合いの授業の充実が、児童の活発な言語活動を促進し、生活場面でのトラブルの解消に効果を発揮したと考えられる。

(ii)-4 成功体験の積み重ね（3年間発表しなかった子が発表できる子に）

3年間発表できなかったSさんが、発表できるようになるまでの経緯を語ってくれた。

1年生の時、算数で間違えてから「自分だけ間違っているなら、みんなに迷惑をかけるから嫌だ」と思って、3年間ずっと発表しなかった。間違っているのではないかと不安だったり緊張したりするから、発表するのが嫌だった。「大丈夫だから」と言われて発表したこともあったが、3年生でも、まだ発表が嫌いだった。

一度の失敗体験が、Sさんの気持ちを固く閉ざしてしまったことがわかる。この時、教師がSさんの気持ちを汲んで、自信を失わせないように声掛けをしていれば、Sさんの気持ちは違っていたのではないだろうか。

話し合いの授業の後から少しずつ、「間違ってもいいんだ」と思えるようになってきた。実際に、勇気を出して発表してみたら、正解していてうれしかったことがあった。

検証授業後も定期的に話し合いの機会を設けたことに加え、勇気を出して発表し成功できた喜びが、その後の変化のきっかけとなったようだ。日々の活動の中に、一分間スピーチや読書紹介、言葉のキャッチボールタイム（対話練習）などの伝え合う活動を多く取り入れ、小さな

成功体験を積み重ねさせることで、児童の変容を生む可能性も高まるだろう。

その後の国語の授業で発表したとき、みんなに拍手してもらえたことがあった。とてもうれしくて「よっしゃー！」と思った。「もっと発表したい」と思えるようになった。「間違えてもいいから発表しよう」と思って、実践できるようになってきた。

今回、Sさんが発表できるようになった要因には、小さな成功体験の積み重ねと、成功と一緒に喜んでくれたクラス友達の温かい雰囲気が挙げられるだろう。さらに、そこに至るまでには、日々の教師の支援が大きく影響していることは言うまでもない。われわれ教師が、発表したがらない児童の気持ちを理解し、褒めて自信を持たせるなど、適宜児童に働きかけることができれば、いくらでも児童が変容する可能性があるのだ。

最後に、Sさんに話し合い活動でこれからも大切にしようと思っていることを聞いてみた。

これからも言葉のキャッチボールを続けていきたいと思った。

今回の授業で指導の手立てとして取り入れた「言葉のキャッチボール」という合言葉が心に残り、実践につながっていることがわかった。

今回のインタビュー結果から、発表したがらない児童は、心に大きな不安を抱えており、その不安を軽減する機会が得られれば、発表を好きになるきっかけになることがわかった。

4. まとめと課題

(1) まとめ

(i) 「聞いて返す力」育成のための指導の3つの手立ての工夫とその有効性

①話し合い活動の基本パターンの設定と繰り返しによる定着

話し合い活動中、自分が今何をしているのか、次に何をするのか、等の見通しがもてるようになり、話し合いがスムーズに流れるようになった。繰り返すたびに「聞いて返す活動」が活発になされるようになっており、この話し合い活動の基本パターンの他教科への応用も十分に期待できる。このパターンを応用することで、発表したがらない児童に成功体験を積み重ねる機会をより多くもたせることもできる。

②「言葉のキャッチボール」という合言葉による「聞いて返す」ことの意識化

多くの児童の振り返り欄に、毎回のように「言葉のキャッチボール」という合言葉が記述されており、この合言葉を強く意識して話し合いに臨んでいたことがわかった。発表したがらない児童の意欲の向上にも有効であった。

③「つなぐ言葉」を重視した「聞いて返す」話し合い活動の実施

話し合い活動以外の授業でも、友達の意見に「つなぐ言葉」を使って返す機会が増え、児童に、友達の意見を比べながら「聞いて返す力」が育成されつつあることがわかった。特に、聞く力の育成に有効であった。

(ii) 発表したがらない児童が「聞いて返す力」を高めるための教師の配慮事項

①温かい学級の雰囲気の育成

発表したがらない要因として「みんなと違っていたらどうしよう」や「間違えたら恥ずかしい」など、周囲の受け止め方に不安を感じ、発表を躊躇する児童の姿が浮かび上がってきた。たとえ間違った発言をしても決して笑ったりせず、それをまず受け入れ、それをもとに教え合えるような、温かい学級の雰囲気を築くことが、話し合い活動においての必要条件と言える。

②成功体験を積み重ねる場の設定

今回提案した指導の手立てを取り入れた授業をより多く実践し、発表の喜び体験（教師や友達に認められる体験等）を多く積ませたことが、発表しながらない児童の不安の軽減に大きな効果を与えた。普段から話し合いの場を多くもたせ、小さな成功体験を積み重ねさせることを心掛けたい。

③自分の考えをもたせる工夫

自分の考えがもてない児童には、まず最初にワークシートに考えを書く手立て[指導の手立て(エ)]や、友達の考えを聞いて、その考えをもとに自分の考え構築する手立て[指導の手立て(キ)]等を取り入れることが有効である。

④技能指導の工夫

発言の仕方がわからない児童には、つなぐ言葉を使った話型の提示等の技能指導[指導の手立て(イ)]が有効である。

⑤聞く力の育成

児童が多くの友達の多様な考えに触れ、価値観が広がる楽しさを実感することで、もっといろいろな意見を聞きたい、質問したい、等の意欲が向上し、「聞いて返す力」の育成につながっていく。また、自分の考えと友達の考えを比べながら聞く中で、自分の考えが内容的に深化していくことの実感も、児童を変えるきっかけとなる。話し合い活動を経て、オリジナリティのある考えが浮かんだ児童は、自己肯定感の高まりを感じたようであった。価値観が広がる楽しさ、選択肢が広がる楽しさ、考えが深化する楽しさ等への気づきが、さらに多くの考えに触れることへの意欲を向上させ「聞いて返す力」を高める原動力となっていくのである。

◎我々教師は、日々の教育活動の中で、発表しながらない児童が抱えている不安要因を正しく把握し、上記で提案したような個に応じた手立てを講じることで、個々の不安を軽減することが必要である。

(3) 課題

- (i) 「聞いて返す」活動が活発になされて広がった児童の考えを、より質の高い話し合い活動に導くための教師の関わり方（発問、板書、介入等）や指導の手立てを考案する。
- (ii) 「聞いて返す」指導の他学年、他教科、他領域への応用についても研究を深めていく。

5. 主要参考文献

- 秋田喜代美『小学校国語科教育研究』全国大学国語教育学会、2009 年
秋田喜代美『授業研究と談話分析』放送大学教育振興会、2006 年
秋田喜代美『子どもたちのコミュニケーションを育てる』教育開発研究所、2004 年
小森茂『教員養成セミナー 4 月号—学習指導要領はこう変わる—』時事通信出版局、2008 年
佐藤康子、大内善一『子どもが語り合い、聴き合う国語の授業』明治図書、2006 年
西山正治・宮原久直・倉崎恵美子・原義一「積極的な聞き手を育てる学習指導方法の改善に関する研究」佐賀県教育センター、2001 年

村松賢一『対話力を生む話すこと・聞くことの学習―理論と実践―』明治図書、2001 年

村松賢一『国語科で育てる相互交流能力 小学校編』明治図書、2000 年

渡辺良勝・山本城「言語活動の充実に関する研究」神奈川県立総合教育センター、2010 年